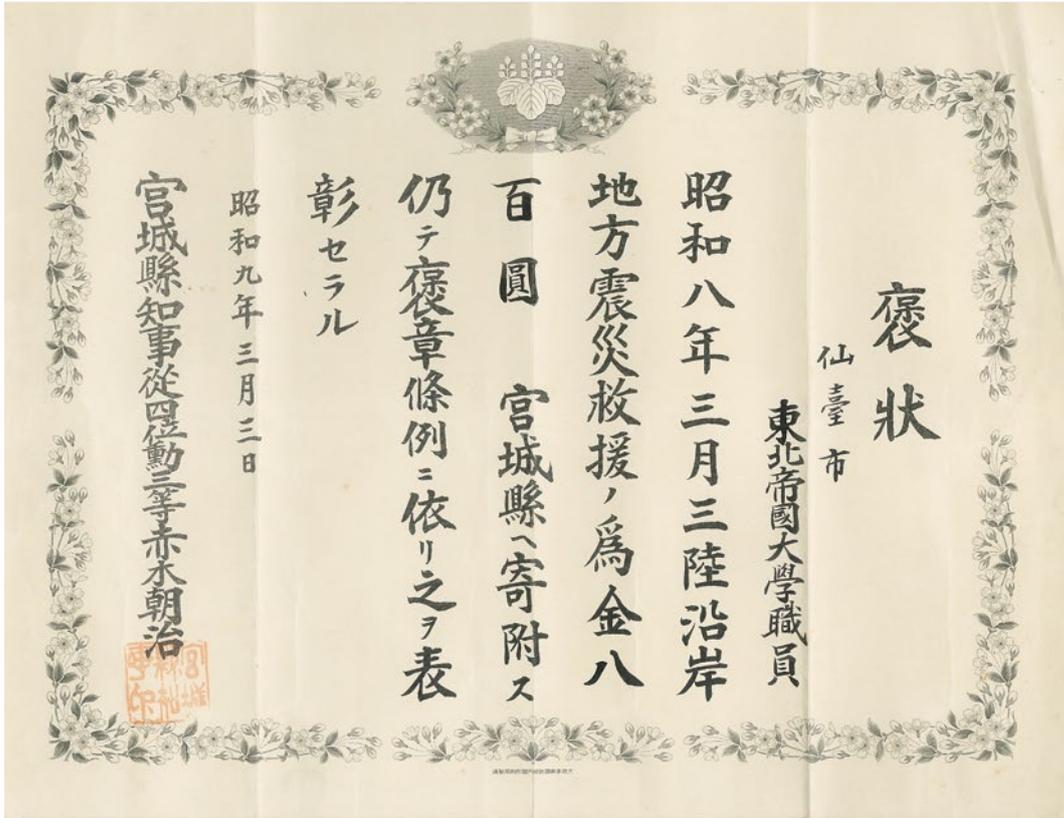




## TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



### Index

- 2 先人の足跡・未来への継承  
東北大学災害科学国際研究所  
准教授 佐藤大介
- 5 史料館所蔵資料による  
研究の状況と展望  
東北大学史料館  
協力研究員 吉葉恭行
- 6 企画展  
史料館ただいま出張営業中を開催!
- 6 史料館のうごき
- 7 資料の公開について
- 8 お知らせ  
・東北大学史料館のリニューアルについて  
・片平本館への復旧移転にともなう利用  
休止について

資料：三陸沿岸地震救援金寄附に  
対する褒状

## 戦前の東北大学と災害との取り組み

東日本大震災発生から、2年が経とうとしています。この間、東北大学では研究機関のみならず、自治体や民間とも協力しながら、様々な形で震災復興支援や災害対策への取り組みが行われています。こうした災害研究における本学と社会との関わりは戦前期においてもみることができます。戦前の東北帝国大学では、民間の学術奨励団体からの研究奨励や寄附金を通じた研究が盛んに続けられてきました。関東大震災の際に地質調査隊を現地に派遣した矢部長克は、財団法人東照宮三百年祭記念会に地震地帯と地質構造に関する研究において研究費を申請しており、畑井新喜司も昭和三陸地震のあった1933年（昭和8）から34年にかけて財団法人である斎藤報恩会より地震に対する魚類の反応の研究で助成を受けています。また1939年には加藤愛雄が「地震及び火山活動に伴ふ地球磁場の変化に関する研究」で愛知揆一氏の寄附からなる愛知奨学記念賞を受賞する等、民間の学術奨励団体による研究補助が災害研究を下支えしていました。一方で東北帝国大学としても1933年の昭和三陸地震と津浪発生に伴い、大学職員から救援金八百円を取り纏める等、復興支援を行い、地域への社会貢献を行っています。

## 先人の足跡・未来への継承 被災歴史資料レスキューでの個人的経験から

東北大学災害科学国際研究所 准教授 佐藤 大 介



東日本大震災では、被災地となった地域の人びとが歴史的に積み重ねてきた歩みを示す古文書や民具、古美術品など無数の歴史資料が被災した。筆者は2003年8月から活動するNPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク（宮城資料ネット）の一員として、また2012年4月に発足した東北大学災害科学国際研究所の一教員として、今なお続く被災地からの救援要請に対応する日々を過ごしている。

震災で被災した歴史資料の救済に際して、東北大学史料館からは津波で被災した文書史料の冷凍保管のための施設提供を受けるなど多大な尽力を受けている。最初に記して御礼申し上げたい。

一方、これまでの被災歴史資料の救済については多くの発表機会を得てきた。そこで今回は一人の東北大学関係者として、活動の中で触れた東北大学の先人たちの歩みを紹介したい。その上で、震災経験も含めた東北大学の歴史を将来に継承するための課題について私見を述べてみたい。

写真1は、宮城県村田町のやましよう商人記念館である。江戸時代の紅花商人で、戦前まで同町屈指の地主であった大沼正七家の旧邸には、江戸時代の土蔵から近代和風建築を含む建造物群が遺されている。これらは震災以前に、東北大学OBでもある七代目正七氏（2012年逝去）から町に寄贈され、観光施設として活用されてきた。

この建物は、旧制第二高等学校校長の阿刀田令造（1878～1947）ゆかりの施設である。大沼家六代目の正七氏（1899～1939）は阿刀田に私淑し、深い親交を結んだ。正七は地域向けの学習会「村田修養会」を開催



写真1 村田町やましよう商人記念館  
(2011年4月5日撮影)

し、阿刀田をしばしば村田町の邸宅に招いた。阿刀田はその紀行文で大沼家のことに触れるとともに（『続郷土人として』仙台郷土研究会 1940）、昭和14年（1939）刊行の著書『郷土ものと紀行』（仙台郷土研究会）の冒頭では、同年に急逝した六代目正七への献呈の辞を記載している。

やましょう記念館の建物は震災で大きな被害を受けたが、幸い村田町により修復が進められている。常時開館には数年かかるとのことだが、東北大学の歴史の一場面をなすともいえる施設は、震災を乗り越え、地元の手で継承される方向に向かっている。

写真2は、仙台市宮城野区蒲生の専能寺にある鐘楼である。津波で転倒したこの鐘楼もまた二高に関係している。その傍らにある、津波で破損した案内板によれば、昭和20年（1945）7月10日の仙台空襲で焼け出された二高道交寮の学生たちは、当時の住職の世話を受け4か月間同寺に寄宿したという。昭和47年（1972）、当時の学生38名が感謝のため梵鐘を寄進し、さらにその話を伝え聞いた塩竈市の門徒が鐘楼の建設費を寄付して鐘楼が完成したという。同寺によれば、梵鐘は大事に保管されているが、鐘楼の再建はいまだ行われていないとのことであった。

写真3は、宮城県栗原市の個人宅にある昭和20年（1945）5月付の土井林吉（晩翠）書簡である。二高の蔵書を当家に疎開させる際、土井個人の蔵書を合わせて受け入れてもらったことに対し書画2点を進呈する旨の礼状である。現在の栗原市方面への東北帝大や二高の教員および蔵書の戦時疎開については、2008年の岩手・宮城内陸地震での歴史資料レスキューで地元の所蔵者から情報提供があった。今回の震災で、新たな関連史料を確認することになったのである。なお、同家の築200年の母屋は、この震災での被災により、2013年2月に解体された。

筆者が関わっている「被災歴史資料」は、かつての仙台藩領であった宮城県や岩手県南部で民間（個人）が所蔵するものが中心である。当然ながら、その中には二高や東北（帝国）大学に関わる歴史資料が含まれる場合がありえる。また上記のように関連する史跡を「再発見」する可能性もある。今回の一連の歴史資料レスキューを通じて学んだのは、多様な歴史資料を総体として保全するためには、関係者間の情報共有が欠かせないということであった。筆者のような地域の歴史資料に関わる者が大学史料館に協力することで、大学の歴史に関する情報をさらに豊かにすることができると考えている。今後も積極的に情報共有に努めていきたい。



写真2 津波で被災した専能寺鐘楼  
(2011年5月16日撮影)

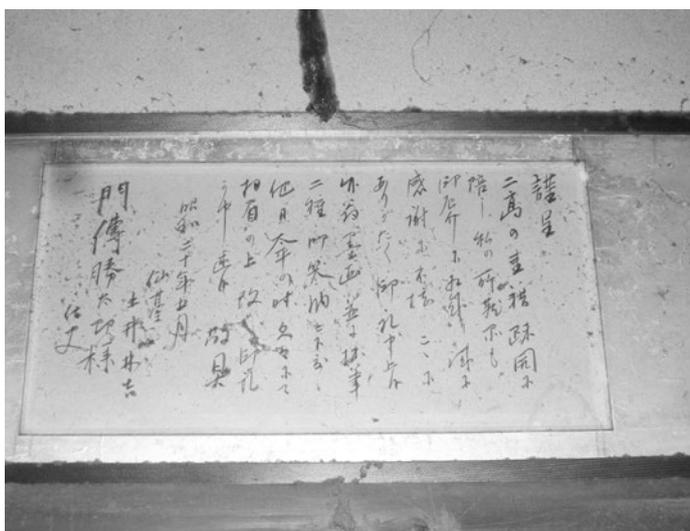


写真3 土井林吉（晩翠）書簡  
(2011年8月17日撮影)

ところでこの三つの事例は、東北大学が戦前、さらには戦中から終戦直後の危機に際して、地域の人びとに支えられてきたことの証である。震災を契機に様々な歴史的・文化的なつながりに改めて注目が集まっているが、筆者にとっては一連の二高関係者の歩みを知りえたことがその機会の一つとなった。大学と地域との歴史的なつながりを再確認できたことは、東北大学が求められている被災地への貢献を筆者の立場から果たしていく上で、大きな動機付けとなっているのである。

未曾有の震災を経験した東北大学とそこに関わる人びとは、すでに歴史的な存在になっていると個人的には考えている。東北大学史料館として、本誌16号で紹介された、昭和53年（1978）の宮城県沖地震では体系的な記録保存がなされなかったという教訓を、今回の震災では十分に生かしてほしい。さらには関係者やボランティア団体などの資料収集も積極的かつ長期的に進めてほしい。むろん、筆者も含め関係者は史料館の記録保存活動への積極的な協力が求められよう。

さて、筆者自身もまた、震災直後から膨大な「資料」を作成し、手元で保存している。職務で作成した電子メールや文書ファイル、被災地で撮影したデジタルカメラの画像データなどである。ここに震災後に福島県の実家と取り交わした安否確認の往復メールなど私的なデータが渾然一体となって、パソコンのハードディスクに保存されている。

筆者は専門である江戸時代の研究において主に分析しているのは、日記や私的記録、書簡類である。これらには公的な出来事とともに、それに対する作成者個人の立場や認識が記され、意外性のある内容に触れることも多い。筆者の「資料」にも、後世の歴史家にとって「意外な」内容が含まれているのかもしれない。仮にこれらが大学史料館の収集対象に含まれるとするなら、古文書と決定的に異なるのはデジタルデータであるという事である。この点は、震災対応やその後の復旧過程で作成された大学公文書においても同様であろう。

和紙に墨書きの古文書は、津波に濡れても文字が消えなかった。洋紙にペン書きの近代文書は、インクがにじんで消えかかった。筆者のハードディスクが放置されてそのデータが「残る」ことは、災害の有無を問わず「絶対に」ありえない。媒体の安定性に依存した記録保存が不可能になりつつある状況では、人間が自らの営みを遺そうとする強い意志と公的なしくみ作りが、これまで以上に求められるのである。多様な「未来の歴史資料」をどのように遺すか、大学史料館の役割が問われよう。むろん、この問題は一機関だけで解決出来ることではない。デジタルデータを活用して歴史資料保全を進める筆者の活動にも深く関わっている。

東北大学に自らの歩みを遺そうとする意志があるなら、その中心となるのは東北大学史料館において他にはない。震災から時間が経過するにともない、その役割はいっそう重要になることだろう。一方、筆者としては、人びとの歩みを記録し後世に伝える責務に向き合う立場として、今後とも大学史料館との連携を深めていきたい。そのことで、「記録を遺す」活動の意義について社会に共通認識を広げるための一翼を担うことができると考えている。

## 史料館所蔵資料による研究の状況と展望

東北大学史料館 協力研究員 吉葉 恭行



筆者は、共同研究者とともに、主として東北大学史料館等のアーカイブズが所蔵する「公文書」や「個人文書」の調査・収集・解析を通して、戦前期日本の科学技術行政や民間による学術研究助成と帝国大学における学術研究体制の形成過程について研究を行っている。これまでは、戦時下の1943（昭和18）年より実施された大学院特別研究生制度に関する研究や、大正末期から昭和初期の財団法人斎藤報恩会による学術研究助成事業と東北帝国大学とのかかわりに関する研究をそれぞれ進め、成果を報告してきた<sup>i</sup>。

またここ2年ほどは、1943（昭和18）年より文部省所管の学術研究会議により組織された研究班と、その組織化が東北帝国大学内の学術研究体制におよぼした影響についての研究を進めている。きっかけは、史料館所蔵の個人文書である「大久保準三文書」に所収されている「昭和十九年度科学研究動員下ニ於テ研究セントスル題目調書」の存在であった。大久保準三は、1943（昭和18）年に附置された科学計測研究所の初代所長である。昨年度は、この個人文書を手掛かりに史料館や他大学等のアーカイブズが所蔵する公文書や個人文書の調査・解析を通して、「昭和十九年度科学研究動員下ニ於テ研究セントスル題目調書」の史料的な位置づけや、東北帝国大学と学術研究会議とのかかわりの一端を明らかにしてきた<sup>ii</sup>。

学術研究会議研究班は、1943（昭和18）年8月20日に閣議決定された「科学研究ノ緊急整備方策要綱」に基づいて、学術研究会議がいわゆる戦時研究を遂行するために選定した研究者らによって組織されたグループであった。戦時研究といえば、兵器開発などの直接戦力となるような、工学系の研究であると理解されがちであるが、科学戦・思想戦の重要性が叫ばれていた当時、数学・物理学・化学などの「基礎科学」はもとより、法学・経済学・文学などの文科系の研究分野も無縁ではなかった。

このことの一部を示す資料となったものが、史料館所蔵の「村岡典嗣文書」であった。共同研究者の本村昌文氏によるこの個人文書の解析により、東北帝国大学法文学部文化史学第一講座の初代教授であった村岡典嗣が、1944（昭和19年）より実施された人文科学研究分野の研究班の班長として、「人文科学研究費」を交付されて、「民族性ノ比較研究」を展開していたことが、明らかになってきた<sup>iii</sup>。

筆者らの研究成果は、はからずも、理工系と文科系の異なる研究分野の研究者の「個人文書」が、「公文書」を交えた解析を通して、戦時下の科学技術政策である学術研究会議研究班というキーワードでつながり、大学における学術研究体制と研究状況の全体像を把握するうえで大変有用なものとなったという事例を示すことになった。この事例のように、筆者らは、「公文書」と「個人文書」の相互補完の重要性を実感しながら研究を進めている。今後は、これまで積み重ねてきた研究成果を包括的にまとめていきたいと考えている。

昨年9月、筆者らは中国の北京日本学研究中心において、「戦前期の帝国大学における研究体制の形成過程」という共通テーマの研究報告会を開催した。史料館から後援をいただいたことにこの場を借りて感謝申し上げたい。筆者は学術研究会議研究班と東北帝国大学の理工系研究分野について、本村氏が文科系研究分野について、そして米澤氏が斎藤報恩会の学術研究助成と東北帝国大学について、それぞれ研究成果を報告した。研究費をめぐる問題は中国の研究者にとっても大きな関心事であるようで、尖閣諸島問題で対日批判が高まるなかで開催であったにもかかわらず、多くの聴衆に恵まれ、数多くの質問・意見をいただいた。開催した意義は大きかったので、今後も国際的な学術交流を進めていきたいと考えている。

<sup>i</sup> 研究成果の一部は『東北大学史料館紀要』第2号～第7号に掲載されている拙論を参照されたい。なお斎藤報恩会に関する研究は、米澤晋彦氏との共同研究である。

<sup>ii</sup> 拙著「戦時科学技術動員下の東北帝国大学—大久保準三文書を手掛かりとして—」『東北大学史料館紀要』第7号、2012、pp.13-33.

<sup>iii</sup> 本村昌文「村岡典嗣『日本国民性ノ精神史的研究』執筆の背景」『東北大学史料館紀要』第7号、2012、pp.34-45.

## 企画展 史料館ただいま出張営業中を開催！

11月19日（月）から12月16日（金）まで、附属図書館本館エントランスホール常設展示コーナーにて「史料館 ただいま出張営業中」を開催しました。史料館本館の改修・図書館内への仮移転という機会を利用して、東北大学史料館の常設展示やアーカイブズとしての「しごと」の内容を、図書館本館を利用する学生さん達にも広く知ってもらいたい、ということで、企画・開催したものです。

展示は、前半で「東北大生の100年」(11/16～12/4)、後半で「東北大学のひとびと」(12/5～16) という2本立てでおこない、それぞれ片平本館での常設展示の内容といくつかの新資料をミックスして構成・公開しました。後半の展示では八木秀次・小宮豊隆など往年の名教授たちの講演音声を聴けるコーナーも好評だったようです。またこのほか明治20年代の第二高等中学校の成績表（井上準之助・高山樗牛など）や創立以来の東北大学への来訪者のサインを連ねた芳名録、戦後仙台に駐留した米軍が作成・発行した”Map of Sendai”などの珍しい資料もあわせて公開しました。

多くの学生たちに東北大学の歴史に触れてもらい、また史料館を利用してもらうためにも、川内地区での展示会等については片平本館復旧後も継続して行きたいと考えています。（永田）

東北大学史料館企画展

### 史料館 ただいま 出張営業中！



第1部 「東北大生の100年」  
11月19日（月）～12月4日（火）

第2部 「東北大学のひとびと」  
12月5日（水）～12月16日（日）

附属図書館エントランスホール常設展示室

東北大学には、歴史公文書をはじめ、東北大学の歴史に関する様々な資料を収集・保存・公開する「東北大学史料館」があります。

史料館は、片平キャンパス内にある大正時代の建物（旧図書館本館）を拠点に活動していますが、東日本大震災によって建物の一部が損壊したため、復旧・改修工事が完了する来年春までのあいだ、こちらの図書館本館（2号館内）に一時移転して、資料の閲覧公開をおこなっています。

この展示では、片平の史料館本館で公開しておりました、東北大学の歴史に関する常設展示の一部をご紹介します。この機会に史料館の活動を学生さんにも広く知っていただき、史料館を気軽に利用していただければと思います。

こちらからご覧ください

## 史料館のうごき

### ◇東北大学初任者キャリアプランセミナー「公文書管理について」(11/14)

東北大学職員への研修の一環として、「公文書管理について」のキャリアプランセミナーが行われました。セミナーは二部構成で、前半を総務部総務課が現用文書の作成・管理にかかわる手続き等について話し、後半に当史料館の永田英明准教授が「東北大学の文書管理とアーカイブズ制度」と題して、公文書の管理・移管と公開について、公文書管理法や史料館公文書室の役割との関連で説明しました。次年度以降も継続実施予定です。

### ◇当史料館所蔵小川正孝資料が、日本化学会「化学遺産」に認定

東北帝国大学理科大学長、東北帝国大学第4代総長を務めた化学者、小川正孝のX線分光写真乾板、銀製のつぼ等からなるニッポニウム関連資料が、このほど日本化学会による「化学遺産」に認定される見込となりました。X線分光写真乾板は、小川が自らの所蔵するニッポニウム試料を1930年金属材料研究所の青山新一に依頼し分析した結果の記録で、1908年に小川が発表したニッポニウムが、実は1925年にノダックらが発表した72番元素レニウムに相当するものであったことを示しています。この直後小川は急逝し測定結果は公表されませんでした。近年吉原賢二本学名誉教授により発見・公表され、小川の業績が再評価されるに至っています。



## 資料の公開について……………

### ●個人・団体文書

#### 阿部日本文化研究所資料

阿部日本文化研究所は、元東北帝国大学法文学部教授であった哲学者の阿部次郎（あべ じろう、1883～1959）が私財を投じて、1954年（昭和29）に開所した施設です。日本文化の特質を明らかにするという研究目的のもと、東北大学文学部の各分野の教授が多数参加しましたが、1960年に理事長である阿部が死去し、文学部の附属施設として日本文化研究施設を設置、その後1996年5月に新設された東北アジア研究センターへと発展的に解消することになりました。

本文書19点の内容は、主として阿部日本文化研究所の解散とそれに伴う東北大学への寄附申請関連です。大平五郎名誉教授によって、2000年1月に寄贈されました。



#### 山岳部・山の会旧蔵史料

東北大学山岳部およびその同窓会である「山の会」の関係資料。東北大学山岳部は、1923年（大正12）に設立された東北帝国大学山岳部、さらに1914年（大正3）設立の二高山岳部の伝統を、1947年（昭和22）の学制改革により引き継いで、活動してきました。全部で294点の資料は、部誌・会報・部報、海外遠征資料、遭難資料、山小屋資料、などに分類されています。また1986年のチベット・ニエンチェンラ登山に関しては、関連する映像や音声資料が残されています。

山岳部の50年史編集のため収集・整理され、2009年に編集委員長であった斎藤雅英氏を通じて寄贈されました。



#### 科学計測研究所太陽炉関係資料

2001年（平成13）に多元物質科学研究所に統合された科学計測研究所が、まだ仙台市三条町にあった時代、ヘリオスタット型太陽炉（太陽光を反射させて集め高温を得る装置）が完成し、附属太陽エネルギー実験所となり、1990年（平成2）の大規模改組に伴い廃止となりました。本文書は、太陽炉および太陽エネルギー実験所において研究・運営に関わった人々により残された文書で、設計図面が多く含まれています。多元物質科学研究所の水崎純一郎教授が、2011年度の退職後、4点（114件）を寄贈されました。



#### 原龍三郎文書

原龍三郎（はら りゅうざぶろう、1888～1968）は、長野県出身の応用化学者です。1917年（大正6）から1947年（昭和22）に退官するまで東北帝国大学・東北大学の教授を勤め、1944年（昭和19）の非水溶液化学研究所設置時は初代所長となりました。研究分野は固定窒素、青化物、ソーダ、海水、液体アンモニアなど多岐にわたり、1956年（昭和32）には日本学士院会員、1962年（昭和38）には文化功労者に任じられました。

全96点の史料の中心は、論文原稿・論文抜き刷り、各種証書などです。原は「陵西」の号を名乗って文化的創作も行っており、自身の手による書や墨画なども残されています。1979年以降3回に分けて、原教授ゆかりの研究所から寄贈されました。



## 東北大学史料館のリニューアルについて

東北大学史料館本館（片平キャンパス）は現在、東日本大震災による被災箇所の復旧および耐震補強を目的とした改修工事をおこなっています。

今回の工事では、本学を代表する歴史的建造物でもあるこの建物を今後も東北大学を代表する公開施設として永く保存・活用していくため、建物の復旧・補強とともに、建物の特色や利用の便宜を考慮した新しい利用プランにもとづいて設計をおこなっています。

かつての帝国大学図書館の雰囲気伝える2階部分は、創建当時のデザインに近づける形で復旧される予定で、従来1階に設けておりました魯迅記念展示室等を含むすべての展示室はすべてこの2階部分に集約し、階段等とあわせてリニューアルをおこないます。一方1階には閲覧室をあらためて独立したかたちで設け、歴史公文書や個人資料などの所蔵資料をゆっくりと静かに閲覧できる環境を整備します。このほか、本学の歴史に関する貴重な資料を永く伝えていくために、書庫などの資料保存環境も同時に改修整備いたします。

現在のところ、改修工事は平成25年4月まで続く予定で、一般公開の再開は6月以降となる見込ですが、正式な期日等については決定次第ホームページ等でお知らせ致します。

リニューアルされた「古くて新しい」東北大学史料館本館の公開再開を、楽しみにお待ちしております！



改修中の史料館本館（2013年1月）



創建間もない頃の2階展示室  
(昭和初年頃 当時は閲覧室)

### 片平本館への復旧移転にともなう利用休止について

史料館本館（片平キャンパス内）の改修工事完了にあわせて、本館復旧移転および一般公開再開準備のため、所蔵資料の利用を、平成25年4月1日より一時休止いたします。再開については6月頃を予定しておりますが、決定次第あらためてホームページ等でお知らせ致します。

東北大学史料館だより 第18号 2013年3月15日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内27-1 東北大学附属図書館本館2号館内 TEL 022-795-3225

E-mail desk-tua@library.tohoku.ac.jp URL <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/>